

第5回

「投稿論文を査読に回すには」

笹野公伸

東北大学大学院医学系研究科病理診断学分野教授

筆者は現在複数のジャーナルでEditor/Associate Editorとして編集に関わっています。特にEndocrine Reviews (IF: 15.745), Journal of Steroid Biochemistry and Molecular Biology (IF: 4.561), Endocrine Related Cancer (IF: 5.267) とNeuroendocrinology (IF: 3.608)ではEditor/Associate Editorとして投稿された論文のスクリーニング、査読者への論文の配信などに関わることが多いです。

論文を投稿する立場からは、出した論文が査読に回せるようにすることが何よりも重要になります。すなわち最初の“障壁”を越えて門前払いされないようにすることです。この点に関し、これから論文を投稿しようとする先生方の参考になればと思い、如何にしてEditor/Associate Editorの最初のスクリーニングを乗り越えて査読に回せばよいのか？というところの上記の経験に基づいた私見を以下にまとめます。

投稿するジャーナルの選択

まとめた論文の投稿先を考える際に、多くはそのジャーナルのimpact factor (IF)を考慮に入れて決めることが多いと思われます。せっかく苦労してまとめた研究内容なのでIFが少しでも高いところに投稿したいと考えるのはごく自然で、研究内容を自負するのも当然です。しかしやはり自分自身が投稿しようとしているジャーナルの過去1～2年の論文をつぶさに見て、自身の論文内容がそのなかにフィットしているかどうかを冷静に見ることが望まれます。すなわち自分自身を過大評価せず相手をよく知るという基本的なことが自身の論文が門前払いされないことの第一歩とな

ります。むしろ最近懸念されるのがジャーナルの多くが毎年のIFの推移に一喜一憂し、citationsが多くありそうな論文の採用を優先し、医学研究の基本となる症例報告が出せるジャーナルが少なくなっていることです。

論文内容の質的確認

多くの出版社では現在、図表などの不適切な画像操作を検出するソフトで投稿された論文を精査することに加え、自身のもを含む既存論文の文章とどのくらい重複があるのかを詳細に検討するcross checkなどのプログラムで最初に篩をかけることが日常的に行われています。すなわちこれらのステップで問題がある論文は通常Editor/Associate Editorのところに戻る前に門前払いされてしまいます。実際問題になるのは後者で、どのくらいの割合で文章の重複が認められるか？というところがあげられます。この点はジャーナルの編集方針により全く異なりますが、例えばIntroductionやMaterials and Methodsでしっかりと既存論文が引用されていれば、その部分が50%を超える場合でも許容範囲と私が判断する場合には考えています。しかし英国系の一部のジャーナルではいわゆる“Public School”の教育の基本となっている“rephrase”を重視しこのcross checkの閾値がかなり厳しいところもあります。このような英国のposhな“Public School”では例えば“No”を“I would not say yes”などに表層的あるいは言葉の遊び的な言い換えを重視する教育を行っていることからこの傾向は決して不思議ではありません。しかしこの“rephrase”でcross check